# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０２２年６月４日
文責：ＪＵＮ

## １人１台端末配備から１年

### １　忘れ去られている端末導入の意味

昨年度の今頃、全国の学校は、コンピュータ端末１人１台配備への対応に追われていた。新型コロナウイルス対策の切り札としての登場だった。

やむを得ないことだったと思う。飛沫感染の恐れのない通信機器を学びに活用することでなんとかしようと考えざるを得なかったからである。ただ、それとともに、莫大な費用をかけて導入しただけに、費用対効果に見合うコンピュータ端末（タブレット）の活用が学校に求められた。それが一年前のちょうど今頃の状況だったと言える。

一年を経過し、新型コロナの感染者が減少し、世界的に「with Corona」という対策に切り替わったことにより、さまざまな規制がかなり緩和されるようになった。それにつれて、これまでもてはやされていたオンライン授業はほとんど実施されなくなった。感染した子ども、または別の理由で登校できない子どもが、教室で学ぶ子どもたちと同じように学べるようにと、タブレットで写してオンラインで家庭に送るといった措置を講じられてはいるが、それはオンライン授業とは別ものである。つまり、通信機器に頼らない、これまで行ってきた対面の授業が学校に戻ってきたのである。

令和４年度に入って２か月経過して、では、あの１人１台端末はどうなったかということだが、子どもたちがタブレットを駆使して学ぶという姿があまり見られなくなったのではないだろうか。ただ、教師のコンピュータ活用は盛んになってきている。特に、デジタル教科書なるものが行き渡ってきたこともあり、それに頼って授業をする教師が増えているからである。この状況は、よいことではない。このまま流されていったら、子どもの学びは落ちていくように思う。教師にとっても子どもにとっても便利だけれど、便利さは学びにとってよいとは言えないからである。

今、教師たちに求められるのは、子どもの学びにとって何が必要なのか、どうすることで、子どもの学びは深まるのか、そのため教師はどうしなければいけないのか、その判断をすることである。私は、昨年上梓した『続・「対話的学び」をつくる』（ぎょうせい）で、このことはこれからの教育のあり方を決める「分岐点」だと述べたけれど、１年たってその思いはますます強くなっている。

問題は二つある。一つは、教師の指導が「デジタル化」することで、文科省が示している「主体的・対話的で深い学び」から遠ざかっているということである。課題の提示も、課題の考え方も、プログラム化してコンピュータ画面から流して進める授業をする教師の下で、子どもが自ら取り組む学びが深まるとは思えないからである。

学習指導要領には、「学びの過程」が大切だというようなことが述べられている。「過程」ということは、「こうすればよいのだろうか、これでは駄目だ、ではどう考えればよいのだろう」と、あれこれと考える状況のことである。私たちが子どもたちにつけたいと願う力は、今指導しているその問題だけが解けるということではないはずである。その問題だけに留まらない、子どもの「思考力」「判断力」を伸ばすことであるはずである。

それには、早く「結果」を出させる教育ではなく、早く分かる教育ではなく、「分からなさ」に粘り強く取り組む「過程」を大切にする教育でなければならない。「分かりやすい」ということはよいことではないのである。人間の能力は、負荷がかかったときに伸びるからである。負荷をかけない教育は、子どもを怠惰にし、応用のきかない物知りを生み出すことになりかねない。

もし、「デジタル教科書」がそのように使われているとしたら、これは由々しき問題だということになる。コンピュータを使って授業をするときは、やろうとしていることが、子どもにとって単なる「分かりやすさ」にならないか、教師としては「教えやすさ」に陥っていないか。それで、子どもの思考力・判断力は伸びるのか、学ぶ「過程」を大切にしない指導になっているのではないか、というふうに考えなければならない。

二つ目の問題。それは、教師がコンピュータを活用してはいても子どもたちがコンピュータ端末を使っていないということである。学びのＩＣＴ化は、教師の教えやすさのために大切なのではなく、子どもの学びのために大切だったはずである。そこが、今、忘れ去られている気がしてならない。

現象としては２種類ある。一つは、コロナの落ち着きにより、コンピュータを使わない以前の授業に戻った、そういう状況である。もう一つは、それなりにコンピュータ端末を子どもたちに使わせているがそのほとんどにおいて「学びの深まり」に寄与していない、そういう状況である。端的に言えば、そうした使い方ならわざわざコンピュータを使わなくてもよいということになる。

コンピュータを駆使して思考し発見する学びが大切なのは、子どもたちが生きることになるこれからの時代を見据えたとき、仕事においても、生活においても、コンピュータをよりよく使うことが必須だからである。第４次産業革命が進む時代に応じるために、もっと言えば、子どもたちが生きていくために欠くことができないものとして、授業におけるＩＣＴの活用を考えているはずだったと言える。

それが、今、こっそり忘れ去られているのではないだろうか。

## ２　「主体的・対話的で深い学び」において端末を活用する

これからの時代を見据え、もちろん、子どもの学びの深まりのために、コンピュータ端末をどう活用するかということについて、すでに述べてきたことだけれど、前述した状況を考えると、私としても、再度述べておかなければならないように思う。

一年前、とにかく端末を使った授業をしなければということで、ほとんどの教室に端末機器が登場したのだが、その頃の使い方は、一般的に言って好ましくないものが多かった。その学びで、あるいは、そのような場面で、本当にコンピュータが必要なの？と思われる使われ方が結構たくさんあったからである。しかし、当時は、とにかく使ってみること、そして使い慣れることを重

視せざるをえなかった。そのためにこういう状態も、一過性のものとして仕方がないのではないかという風潮があったのも確かである。

そして、今、教室から端末機器の姿が薄くなってきている。それはある意味悪いことではない。不必要な、使わなければいけないから使うという状態がなくなったからである。ただ、どこの学校に行っても、教室や廊下に、端末機器を格納し充電するケースが備え付けられている。今、教室における学びは、そういう設備と学び方とのアンバランス状態に陥っていると言えるのかもしれない。

そのような状態になった今、学校は、改めて、１人１台端末をどう子どもの学びの深まりに生かすかということに真剣に向き合わなければいけない。それは、莫大な費用をかけた費用対効果のために言うのではない。これからの時代を生きる子どもたちにとって、そして、「主体的・対話的で深い学び」実現のために、コンピュータ端末の活用が欠かせないからである。

一般に、ＩＣＴ化は便利になるととらえられている。確かに、ＡＩの普及、単純労働のロボット化は、私たち人間には便利なものである。子どもたちは、今後、さらに発達するテクノロジーによってそういう便利さの恩恵を受けることになるだろう。

しかし、それだけだったら、人間は怠惰になり、大切ないくつものものを失うことになるのではないだろうか。なかでも、考えること、困難を乗り越えること、規格品ではないものを創造すること、アート的なものを創り出すこと、そういう人間の能力はそのためのものである。そして、もっとも失ってはならないもの、それは「人間性」である。人間が人間としての存在意識、アイデンティテイを失くしたら、私たちは滅びへの一途を辿ることになるにちがいない。

ＩＣＴ化は便利さだけでとらえてはならない。私たち学校人は、コンピュータは便利さだけで使うものではないと、子どもたちに実感させる教育をしなければならない。コンピュータの力を借りることで、思考を深め、困難に立ち向かえ、これまでになかったものを創造することもできる、そういう指導をしなければならない。つまり、それは「主体的・対話的で深い学び」においてコンピュータを活用するということである。

そのことは、文科省も述べている。「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の答申は、「個別最適な学び」だけで示されているのではなく、「協働的な学び」と関係づけられているからである。その「協働的（協同的）な学び」は、「主体的・対話的で深い学び」と深くつながる学び方である。

深い思考を要すること、かなりのレベルの課題に立ち向かうとき、そこにどういう事実があるのだろうと探究するとき、創造的な学びを行うとき、それを個々の子どもが別々に取り組むことは難しい。ではどうするか。当然のことだが、そういう学びをどの子どもにおいても取り組めるようにするには、そこに「他者とともに取り組む学び」がなければならない。ひとりでではできないことも、他者と協同すれば道が開ける。だから、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の「往還」が答申において強調されたのである。

私は、ここに、さらに、コンピュータ端末機器の活用を付加したい。探究する学びには、課題に関係する資料が必要である。複雑な課題に挑むときは資料がいくつも必要になる。また、時間

をかけて取り組む場合は、その都度学び取ったことを蓄積しておかなければならない。そういったものを収納しておくのに端末は最適である。多くのものを収めておけるからというだけではない。必要に応じて取り出すことも、複数の資料を画面上で比較することもできるし、それらの資料から統計的データをつくりだすこともできるし加工することもできる。もちろん、そうした研究の成果をもとに自分なりの新しい資料を作成することだってできる。コンピュータは、教科書に従う学習ではなく、子どもたちが取り組む探究的学びにおいてなくてはならないツールである。

一方、コンピュータ端末は通信機器でもある。だからコンピュータを介して他者とつながることができる。話し言葉だけでなく、書き言葉も、図表に描いたものも、絵画的なものも、それを送り合って共有し、そこから何が発見できるか学び合ったり共同研究したりすることができる。だから、一つのテーマについて、課題について、深く取り組む協同的学びにおいて、端末と端末をつなげるコンピュータの機能を活用する、これはとても大切なことである。

つまり、便利さを享受するコンピュータではなく、「主体的・対話的で深い学び」への取組においてこそ、コンピュータを活用する、それが、子どもたちの未来につながるものなのではないだろうか。

使う必要のないところで、あまり意味のない使い方をしたり、かえって子どもの学びへの意欲を削ぎ、機器の操作への面白さだけになってしまったり、そういう使い方は克服する必要がある。

もちろん、教室や廊下に格納された端末機器がケースの中に眠らされているということもよいことではない。必要がなければ使わない、けれども活用には積極的、そうでありたい。

１人１台端末配備から一年、新型コロナ対策という状況に縛られない状況になりつつある。

そういうことからして、今は、本質的な教育のＩＣＴ化への取組を開始するときなのではないだろうか。

それには、昨年の著書で述べたことだが、次のことをはっきり認識しなければならない。

| |
|---|
| 最も大切なことは、コンピュータをどう活用するかではなく、どういう学びを目指すかでなければならない。コンピュータ活用の前に、学びのデザインが存在する。 |

コンピュータの活用が先にあるのではなく、どういう学びに取り組むのかが先にある、これは鉄則である。

子どもの学びが、「デジタル教科書」通りにやらされるものであってよいのだろうか。教師が手取り足取りして教える、そんな教師の一方的な指導に従っていく学びでよいのだろうか。そこに、教師たちの目が向かない限り、ＩＣＴ化どうあるべきかだけでなく、学校教育のあり方が不確かなものになる危険性がある。

何もかも、すべての授業を探究的な学びにしなければいけないとは言わない。けれども、どの教師も、できる限り「主体的・対話的で深い学び」となるような授業づくりに取り組む、そういう意思をはっきりともつこと、それが何よりも大切なのではないだろうか。

私は、昨年の著書で「分岐点」という用語を使ったと前述した。１人１台の端末を活用する教育のあり方は、今、まさに「分岐点」に立っている。先生方が余裕を失うほど多忙であることは十分理解している。けれども、コロナ禍が落ち着きつつある今こそ、探究的学びとそのためのコンピュータ端末の活用ということについて、自覚して取り組んでもらいたいと切に願っている。